

〔翻訳〕

イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（7）

工藤 康弘・田島 篤史・柴 亜矢子訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム（Jörg Wickram）の『少年の鑑』（*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554）本文第十七章および第十八章の翻訳である¹。本稿の共訳者である工藤と田島は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第十六章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである²。なお2018年4月から柴が本研究会に参加しているため、本誌第63号から共訳者として加わっていることも付言する。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ（Hans-Gert Roloff）

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20-32ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（2）」、『独逸文学』第59号、2015年、231-241ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（3）」、『独逸文学』第60号、2016年、101-114ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（4）」、『独逸文学』第61号、2017年、133-143ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（5）」、『独逸文学』第62号、2018年、33-44ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）（6）」、『独逸文学』第63号、2019年、77-89ページ。

の編纂によるヴィクラム全集を用いた³。またゲルトルート・ファウト (Gertrud Fauth) およびミヒャエル・ホルツィンガー (Michael Holzinger) による二冊の校訂版も参照した⁴。前者はヴィクラム研究の第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハンネス・ボルテ (Johannes Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した⁵。

なお原典には章番号もコンマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungeratnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhaffte History von einem ungeratnen Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5 <http://daten.digitalle-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2019年11月10日アクセス)。

第十七章

ヴィルバルトの世話する家畜のもとに狼がやってきて大損害を与えたこと。そのためヴィルバルトは親方のもとから逃げ出さねばならなかったこと。



哀れな運命の鳥ヴィルバルトは、今ではすっかり家畜とともに野原で時間を過ごすことが習慣になっていました。ときおり日向に腰かけては、靴を繕ったり、自分でズボンに継ぎを当てたりしていました。また彼の衣服もいたみはじめていました。上着に穴があくと、そのうえから他の継ぎを当てるのですが、その継ぎが上着の色とあっているのかなんて気にしませんし、シラミの一团が住みついた衣服で我慢していました。ごつごつした黒パンが彼の食事でした。そして神さまがタマネギとニンニクをお与えくださったときはとても満足して、よい食事だったと思うのでした。かつて毎日のようにあらゆるご馳走を食べていた「美食家」が食事を作らなければならないのですが、ブラバント風の料理は一度も出てきませんでした。「善良な」ヴィルバルトにはマルヴァジアワ

インや蜜酒がまるで手の届かないものになったのです。そこで彼は冷たい泉と流れる小川で間に合わせなければなりません。ヴィルバルトは、父親の家で貴族として生活することはできませんし、きれいな衣服に身を包み、他の少年たちから尊敬されて、たっぷりのおいしい料理や飲み物を供されることもありません。しかしヴィルバルトにとっては今の料理の方がはるかにおいしいものでしたし、また父親のもとで食べるよりも、農家で食事です満足していたのです。

しかし移り気で気まぐれな運命の女神は、これではまだ満足しませんでした。というのも、ある日哀れな豚飼いヴィルバルトが家畜を連れて野原にいたとき、運の悪いことに犬を連れていなかったのですが、森から遠くない良い放牧地を歩いていました。さて、正午ごろに太陽が暑く照りつけてくると、家畜を日影に入れてやるため、ヴィルバルトは森に移りました。彼は太くてりっぱな樅の木の下の木陰で昼寝をしようと横になると、ぐっすり眠り込んでしまいました。そこへ森から狼の群れがやってきて、休んでいた数匹の家畜を引き裂いて喰い、そして首に噛みついて多くを殺してしまいました。ヴィルバルトはぐっすり眠り込んでいて、そのような損害や事故については何も聞きもせず知りもせず、このことが起こるまで目を覚ましませんでした。

さて、ヴィルバルトがたっぷりと寝て目を覚ますと、家畜を探してまわりを見渡しました。すると野原を散り散りにおびえて走り回るすがたを目にしました。彼はその場に行くと、狼が残っていた死骸を見つけました。それらは農夫の家畜であることが分かりました。ヴィルバルトよりも驚いた人がいたでしょうか？彼はみずから髪をかきむしり、見るも哀れに嘆きました。「おお、なんてことだ！」彼は言いました。「この哀れな悲しい豚飼いよ、これから僕はどこへ行けばいいだろうか？もはや親方のところへ行くことは許されない。今や僕の報酬は消え去った。僕の衣服はぼろぼろだから、親方は冬服を用意してくれるはずだった。ただけでも彼に合わせる顔がない。親方の家にも古いぼろきれを置いてあるが、それも取りには行けない。ああ、ああ、哀れなヴィルバルトよ！おお、恥ずべきロータルよ、お前との恥ずべき付き合いが僕になんという報いを与えたことか！おお、我が親愛なるフリートベルト、僕の誠実なる兄弟よ、君の誠実な忠告が僕の心に今どれほど刻み込まれてい

ることか！だがもう遅い、振り返るには遅すぎる。おお、フェーリクス、我が親愛なる傳役よ、僕は君の大きな信頼になんとひどく報いたことか！君は兄弟のように助言をくれた。だけど僕はそんなことは歯牙にもかけず、父親のような君の罰やしつけをめぐって、僕は君のふとももを突き刺してしまった。それこそが僕の逃げ出した一番の理由だった。ああ、僕は忠告も助けも受けられないんだ。」

哀れなヴィルバルトがひどく嘆き悲しんでいると、遠くから親方が馬でやってくるのが見えました。というのも豚飼いを失くした家畜が、広い野原ですっかり追い払われ右往左往していることが、隣人たちによって親方に伝えられたからでした。親方は野原で馬を駆って、できる限り家畜を追い立てて集めました。ヴィルバルトはこれ以上ぐずぐずしようとはせず、豚飼いの鞆と棒と帯をつかむと、森深くへと急ぎ、大きな不安のなか、あらゆるやぶにもぐり、ごつごつしたいばらを這って進みました。ひどく引っかけり服がやぶれたので、体中が傷だらけになってしまいました。というのもヴィルバルトには、親方が自分のことを探しに馬でやってくるということ以外、考えられなかったからです。

親方はとうとう、自分の家畜が引き裂かれ喰い殺されて横たわっている戦場にやってきました。そこでたくさんの狼が家畜の上に群がっているところを目の当たりにすると、ヴィルバルトもこいつらに殺されたんだろうな、ということ以外、考えられませんでした。親方はぐずぐずせず、生き残った家畜を追い立てて、馬で家路を急ぎました。というのも、彼も狼を恐れたからでした。

しかし不安と恐怖にかられたヴィルバルトは、急に真っ暗な夜が訪れた今まで、狼のことは考えていませんでした。うさぎが胸の中で跳びまわり、猫が背筋をかけ上がっていきました。ヴィルバルトは神さまとすべての聖人に、この真っ暗な森から助け出してくれますようにと呼びかけました。しかし夜が暗闇と一緒にやってきて、もはや何一つ見えなくなりました。ヴィルバルトにはすべての木々が熊や狼であるように思われました。「ああ、神さま。」ヴィルバルトは考えました。「どこへ行けばいいだろうか？木の上に登れば、狼や猪から十分身を守れる。しかしこの森にたくさんいる恐ろしい熊や大山猫から、誰が僕のことを守ってくれるというのだろうか？僕の命がこれほどまでに大きな危険にさらさ

れたことなんてなかった。ああ、どうして僕は親方を待って、彼からの死の罰を進んで受け入れなかったのだろうか。そうしていれば、野獣たちのえさにはならず済んだのに。」

さて、ヴィルバルトは大きな恐怖を感じながら、このようにあれこれ考えていましたが、けっきょく高い木の上に登り、じょうぶで横向きの木のまたに寝ころがると、眠り込んで落っこちてしまわないように、自分と枝とを腰帯で結びました。しかしその夜、彼は一睡もせず、大きな恐怖と不安を感じていました。まるですべての昼が夜になってしまったかのように、ヴィルバルトにとってその夜はとても長く感じられました。葉っぱが一枚木から落ちると、これは野獣かそうでなければ怪物だ、と考えました。彼はその夜、木の上でとても興奮していたのでした。

さて朝になるやいなや、ヴィルバルトは木から下りて、踏みならされた道に出るまでとても長いこと歩きました。その道を行くと、彼は森を抜けだし、ヴィールという大きな川にたどり着きました。川沿いにはドブリンという町がありました。ヴィルバルトは町に着くと、とてもへとへとでお腹もすいていました。彼は町の人々の家の前に行き、どうかお恵みください、とパンを乞いました。偶然にも町の豚飼いは下男がいませんでした。彼はヴィルバルトを雇うことにしました。ヴィルバルトはこのことをたいそう喜び、豚飼いにとてもよく仕えました。三ヵ月が過ぎようとした頃、寒さや雨から身を守り暮らしていけるようにと、豚飼いはヴィルバルトに新しい服を作ってやりました。またヴィルバルトが以前に仕えていた農夫よりも多くの食事を与えてやりました。

さて、ヴィルバルトは豚飼いのもとに残しておいて、フリートベルトとフェーリクスが教会へ行き、そしてボースナの宮廷ですてきな結婚式を挙げたことについてお話ししましょう。

第十八章

ボースナの騎士団長の宮廷ですばらしい結婚式が催され、二人の若者を喜ばせたこと。また二人が騎士団長から多大なご祝儀を賜ったこと。



今や結婚式に必要なものをすべて用意すべき時期となりました。騎士団長は、臣下である騎士や伯爵がみな集まって楽しく過ごすために宮廷を開放する旨、国中にお触れを出しました。またあらゆる野獣を対象に大掛かりな狩りも行われました。そこでは誰も一等賞をとろうとは思いませんでした。そんなわけで数日のうちにシカ、ノロジカ、ブタ、クマなど野獣の肉がたくさん集まり、誰もが驚きました。広大な美しい城内庭園には厨房が設置され、また飲食用のテントがたくさん張られまし

た。

さて結婚式が執り行われる日がやってくると、貴婦人たちの華やかさは言うに言われぬものでした。彼女たちは真珠や金銀をまとい、とても美しく着飾ってやってきました。そこへ多くの音が聞こえてきました。トランペット、太鼓、ツィンク、さらにはハーブやリュート、フィドルなどの弦楽器があふれるほどありました。誰も自分の声が聞こえないほどでした。

教会へ行く時間になりました。騎士団長が先頭を歩き、フリートベルトが右側を、フェーリクスが左側を歩きました。騎士団長は二人の手をとって導きました。すぐあとに喜色満面の老騎士ゴットリーブが続きました。彼とともに歩くのは騎士団長の宮廷長官、それに続くのは大勢の伯爵、騎士、召使たち。最後に花嫁となる二人の美しい乙女たちが、豪華な金の馬車に乗ってやってきました。さらに続いて他の華やかできれいな馬車が、どれも美しい貴婦人たちを乗せてやってきました。

さて一行が教会の前に来ると、すぐに主席司祭が取り掛かり、最初にフリートベルトとその愛する乙女に対し、結婚生活とはどういうものか、また誰がどのように結婚生活を始めるのか、さらにはなぜ二人はそのような聖なる状態を続けるべきなのか、やさしい言葉で注意を与えました。主席司祭はかなりの時間二人と話をしたあと、彼らに神の祝福を述べ、教会へ導きました。教会では心地よい音楽とともに、ミサがとても厳かに執り行われました。そのあと人々は食卓へ向かい、めいめいがその位に従って席につきました。しかしそこでどんな豪華な料理が運ばれてきたかは書くまでもないと思われます。

一般の結婚式がどういうものか、めいめいが自分で考えてみてください。そこでは盛りだくさん以外の何ものでもありません。あらゆる貧しさを忘れます。結婚式のための買い物をすれば、友人たちがみな喜んで応じてくれます。いとこたちもたくさんいて、みんなニワトリやガチョウを運ぶのを手伝ってくれます。花嫁花婿には美しい長上着、スカート、ズボン、胴着がなければなりません。太っ腹な商人が貸してくれさえすれば、彼らにとって高すぎる布はありません。そうすれば私たちは

二、三日ヴェーヌスベルク⁶にいます。その二、三日が過ぎて清算の段になると、私たちは支払いに行きますが、そこから抜け出せず、結婚式で多くを失います。ワインやその他の支払いはまだですが、いとこたちはもはや見当たりません。彼らはニワトリ、ガチョウ、仔牛などを買って運ぶときは助けてくれましたが、支払いを助けてはくれません。さあ、それではヴェーヌスベルクから聖パトリキウスの煉獄⁷へ行きましょう。そしてその年が終わる前に、彼らはまた同じことをやりたいと思うのです。このくらいにしておきましょう。

さて宴もたけなわのとき、二人の花嫁のテーブルの前へ深紅に塗られた美しい背の高い椅子が運ばれてきました。それを誰にでも見えるように、四人の騎士が両花嫁の向かいに置きました。でもそれが何を意味するのか、誰もわかりませんでした。それは美しくて幅広い天蓋で、その下に花嫁が幾人かの貴婦人たちと座るものでした。騎士団長は二人の花嫁に与える贈り物として考えたのです。それは貴婦人たちのためで、殿方のためではありませんでした。みんなの目に触れないようにです。というのも、騎士団長は愛らしい若い女性たちが口をつぐみ、胸のうちにとどめておくということを知っていたからです。たとえときどき花嫁の友達が何か打ち明けるときでも、彼女は事前に言います。「ねえ、あなたが秘密を守ってくれるなら、お話ししたいことがあるの。」すると相手の女性が言います。「ええ、この件はあなたと私の胸の内に留めましょう。」すると初めの若い女性は言います。「あなたの胸の内にだけ留めてください。」こう言って取り引きを持ちかけます。このことが秘密にされるのは、彼女が別の女性のところへやって来るまでです。こうしたことをみな騎士団長はよく知っていました。だから彼は自分のもくろみを殿方に聞かせる必要はないと考えたのです。

さて先に述べた四人の騎士がやってきました。それぞれが美しくて金で飾られた大きな兜をかぶっていました。そのどれにも多くの金がちりばめられていました。彼らの前を歩いていたのが一人の使者と二人のラッパ手です。使者はみんなの前で贈り物、施し物について大声で知ら

6 愛の女神ヴェーヌス（＝ビーナス）が住むとされる山。タンホイザーの伝説で知られる。

7 快楽を表すヴェーヌスベルクに対し、苦痛を表している。

せました。その後四人の騎士は先に述べた椅子の上に贈り物を置き、貴婦人たちにいとまを告げて再びそこから立ち去りました。食事が終わるとすぐ、どの婦人も夫のもとへ急ぎました。起こったことはすべて使者が自分の目で見た以上によく報告しました。水で手を清めたあと、すてきな舞踏会が催されました。踊りは夕食まで続き、その後の夕食ではまた豪華なごちそうがふるまわれました。そして多くのたいまつが焚かれる中で、再び新たな舞踏会が開かれたのです。

就寝の時間になると花嫁と花婿は恭しく寝所へと導かれました。そのあとはみんなもそれぞれの寝所へ行き、残りの夜を甘い眠りとともに過ごしました。しかし廷臣たちは殿方と貴婦人たちが就寝したあと、ようやくたっぷりと皿に盛り、ぜいたく三昧をしました。

夜が過ぎ、まぶしい光とともに次の日がやってくると、新たに豪華な食事の準備が始まりました。宮廷長官は宮廷で若い貴族たちに、来るべき日に向けて武装し、若者による馬上試合を催すよう命じました。彼らの中で賞をとった者には褒美として宝石を贈ろうと考えました。同じように宮廷長官は馬丁たちにも報酬を用意しました。それは足までひと続きの服でした。彼らは柵の中で馬に乗り、斬れない刀で戦うことになっていました。そこで一番すばやく馬を駆ることのできた人には、およそ六ドゥカーテン相当の賞品が贈られるのでした。

さらに、下級騎士たちは盾持ちたちにも三ドゥカーテン相当の衣服を与えました。彼らは柵の中で、硬く詰め物をした革製のこん棒で戦わなければなりませんでした。鎧も兜もつけず、ズボンとシャツを着て寝帽子をかぶっただけの姿でしたが、これがおもしろい見ものだったので。貴族の令嬢たちにも数エレの長さのダマスク織が与えられました。それを求めて彼女たちは走らなければなりませんでした。最初にゴールした人には、そのようなダマスク織が与えられました。あれやこれや似たような気晴らしがこの結婚式でたくさん行われました。それらについてはたくさん書くことができますが、やめておきます。それを知りたい人、見たい人はそれぞれの領主の宮廷で好きなだけ体験できます。

結婚式はおおよそ八日間続きましたが、八日目が過ぎるまで誰も帰りませんでした。そのときになってみな騎士団長にいとまを告げ、馬に乗って家路につきました。フリートベルトとフェーリクスはそれぞれの伴侶

と大いに楽しく暮らし、彼女たちはほどなくして身ごもったことを自身で感じたのです。これによってますます大きな喜びに包まれましたが、これはこのくらいにして、今度は再び我らがヴィルバルトに目を向け、彼がどうなったかを見てみましょう。